静岡県医療機関図書室連絡会と大学図書館

小 濱 進*

浜松医科大学附属図書館

I. はじめに

「館種を超えた研修活動」というテーマで静岡県医療機関図書室連絡会（以下「連絡会」と記す）について紹介する。その成立から最近までの経緯については文献がいくつかあるのでそちらを参照していただきたい¹⁻⁵⁾。

ここでは筆者が携わるようになった平成11年以降の連絡会についての感想と、大学図書館が病院図書室と連携していくことの意義などを述べていこうと思う。

II. 医学・医療系図書館の印象

筆者は平成11年4月、静岡大学から浜松医科大学附属図書館（以下、当館とする）へ移ってきた。それまでは夜間の法律・経済系の図書室に勤務していたので、同じ大学図書館といってもまったく異質の図書館にきたことになる。勤め出してすぐに気づいた点がいくつかある。仕事全体に占める文献複写業務の割合が異常に大きい点、24時間開館などのサービスが進んでいる点、研修が多い点、それも「図書館研修」の上に「医学」とつく研修では、それこそ大学図書館員以外も加わる「館種を超えた研修」が行われている。これは他の分野の大学図書館にはあまり見られない現象

ではないか。法学部の図書室の職員が法律事務所など他の機関に働く人々とともに研修を行うということはあまり聞かない。医療関係の図書室・図書館に従事している人々には、館種を超えてある種の連帯感があるように思われる。そして病院図書室との連携があること。連絡会のことを知らなかったのは仕方がないとしても、病院に図書室があることすら知らなかった（一般の人はほとんど病院に図書室があることは知らないと思う。事実、個人的にいろいろな人に聞いてみたが、知っている人は皆無だった）。

医科大学の図書館も同じ大学図書館と気楽に考えていた身にとって、連絡会事務局の仕事は予想外であった。これまでは学生と教官という身内だけを相手にしていればよかったのが、初めての大学外の人との接触である。筆者の連絡会最初の仕事は平成11年11月の秋の定例会と研修会の準備。どのような手順で行うのか筆者は要領をつかめず困惑していたが、会場の手配や研修内容の決定など、病院図書室の人たちの後押しで開催することができた。その後、平成12年度の春の研修、秋の定例会・研修会と3回の連絡会関係の仕事をしてきた。

III. 研 修

連絡会の一番大きな活動は、春と秋に行う研修会である。春は当館で開催している。ここには端末70台を備えた情報処理実習室があり、文献検

*Susumu KOHAMA : 〒431-3192 浜松市半田山1-20-1.

kohama@hama-med.ac.jp

(2000年12月13日 受理)

図1. 研修会

索の研修などでは実際に機器の操作を行いながらできるので好評である。情報機器の操作ができないと図書館の仕事が務まらないという状況になっているため、これからの春の研修は情報処理実習室でというのが定番になると思われる。

地図を見ていただくとわかるとおり、静岡県は東西に長く広がっている県である。天気予報などでは、浜松を中心とした西部、静岡を中心とした中部、沼津を中心とした東部、そして伊豆に分けている。連絡会ではもう少し大雑把に浜松近辺を西部地区、静岡を中心として天気予報での東部、伊豆を含めて東部地区と称している。そして春の研修が西部地区にある当館で開催されるため、公平を期して秋は東部地区の病院を会場にして定例会と研修会を行っている。研修と同時に会場となった病院とその図書室が見学できる。ふだん大学図書館へは出張などで訪ねる機会はたくさんある。だが館種の異なる図書館を見学できる機会はそう多くはない。様々な図書室・図書館を直接見ることができるというのは、図書館員にとって貴重な体験である。

今まで連絡会で行ってきた研修会の研修内容は表1のとおりである。前任者の発表⁴⁾に最新の情報を追加している。

これを見ると、文献検索ひとつをとっても時代の変化を見て取ることができる。また、その時々に関心の在り方もわかる。例えば平成10年10月にはEBMについての研修を当館の職員が行い、

図2. 連絡会地図

次の研修会では（連絡会では独自の予算を持たないため、外部から講師を招くのは希なのだが）、作手村国民健康保険診療所所長の名郷直樹氏に、EBMの具体的な実践について話を伺った。

病院図書室では職員の異動が多い。そのため図書館の基礎知識的な研修も随時入れてゆく必要がある。平成11年の秋の研修ではそういう声があったので、文献依頼に関する基礎的な事項やマナーなどの研修を行った。

連絡会のほかに、西部と東部でおのおの浜松市病院図書室勉強会と静岡病院図書室研修会を開いている⁶⁾。筆者が連絡会事務局を担当するようになってからまだ一度も当館から出席していない。しかし2001年、西部・東部ともに講師として初参加する。教えるということは教わること。地域ネットワークが大学図書館の職員に与えるいい意味での影響力の大きさはこういうことから推し量られると思う。

IV. その他の活動

連絡会会則には、目的として「本会は、静岡県の病院又はこれに準ずる医療関係機関の図書室又は図書館相互間の連絡及び協力を推進することにより、医療機関図書室の改善及び職員の資質向上を図り、もって医療の進歩に貢献することを目的

表 1. 静岡県医療機関図書室連絡会研修会

開催年月日	参加人数 (機関)	研修内容等
S.63. 5.31	19 人 (18)	・図書室の分類と整理・文献の入手法
11.18	不明	・引用文献リストの見かたと文献の探し方
H. 1. 5.12	不明	・Index Medicus と医学中央雑誌の使い方－説明と実習
11.16	不明	・外国雑誌の購入について
2. 5.25	22 人 (18)	・雑誌の製本について ・相互利用について
11.29	24 人 (22)	・病院図書室機能標準化マニュアルと業務内容について ・PC-9801 による MEDLINE (CD-ROM) の利用について
3. 5.21	22 人 (19)	・Index Medicus の使い方－講義と実習
10.25	21 人 (18)	・当病院図書室運営上の問題点 (事例報告)
4. 4.21	27 人 (23)	・資料の廃棄について (事例報告) ・NLM による図書の分類について－講義と実習 ・CD-ROM 検索の実際 (見学)
10.21	18 人 (16)	・洋雑誌の特徴と内容 ・図書室の特色あるサービスの紹介 (事例報告)
5. 4.27	20 人 (22)	・文献検索概論 ・当院医療情報部の臨床研究に果している役割とその将来像
		・病院図書室の新築・移転
11.18	24 人 (23)	・文献複写相互貸借サービスについて ・同 (事例報告)
6. 4.26	29 人 (23)	・Index Medicus と医学中央雑誌を使った文献検索法 ・NLM 分類法について
11.15	25 人 (22)	・外国雑誌をとりまく現状について ・製薬会社の文献情報サービス自粛後の病院図書室 ・雑誌廃棄と分担保存について (アンケートと討議)
7. 5.11	24 人 (22)	・雑誌の契約について ・病院図書室の実務 (事例報告) ・サンメディア文献複写委託等説明
11.22	26 人 (25)	・アメリカの病院図書室を中心に'95MLA & 7th ICML に出席して ・雑誌の廃棄について－分担保存をめざした (全体討論)
8. 5.23	30 人 (25)	・看護文献－情報検索と入手 (事例報告) ・インターネット－概要と実習
11.27	24 人 (23)	・インターネットを導入して (事例報告) ・文献複写業務への取り組み (事例報告) ・看護文献の探し方－オリエンテーションの実施と意識調査 ・Virtual Medical Library (医療研修推進財団) 企画について
9. 5.28	31 人 (27)	・インターネット実習－Web で検索する, ホームページの作り方 ・Virtual Medical Library について
11.21	24 人 (22)	・患者図書館－ボランティアの活動を含めた ・各図書室担当者の現状報告と連絡会の今後の運営について (全体討議)
10. 6. 3	26 人 (23)	・ギリシャの病院図書室を見学して ・(株)サンメディアによるシステムの実演と解説
10. 2	27 人 (23)	・コンピュータ増設に伴い図書室の配置を考える ・Evidence Based Medicine (根拠に基づく医療) について
11. 6.25	28 人 (19)	・図書館は患者のために何ができるか?－図書館からの EBM の実践
11. 4	24 人 (23)	・医薬品情報について ・病院図書室実務の基礎－相互貸借について ・病院図書室実務の基礎－パソコンソフトによる蔵書管理
12. 6. 7	31 人 (24)	・PubMed の検索法 ・医学中央雑誌 Web 版について
11.10	25 人 (19)	・統計手法の基礎とパソコン処理 ・利用者へのスライド作成指導 ・JST の病院等医療機関向け提供サービスについて

とする」とある。つまり情報交換や相互協力がこの連絡会の主な目的であり、そのための研修活動なのである。その目的のために連絡会では『ぶくとらっく』という機関誌を発行している。

連絡会では事務局を当館に置いて、事務的な雑用をしている。しかし、連絡会の中心となるのは病院図書室である。そこで会員から6名の幹事を出して情報交換のため連絡網の中心になると同時

に、『ぶくとらっく』の編集も幹事が持ち回りで行っている。連絡会が仕事の重荷にならないように、申し合わせ事項として「幹事の選出に際しては、各医療機関図書室の実情を十分に考慮し、担当可能な機関の中から選出する」としている。連絡会に積極的に関わってもらうためにも、できるだけ多くの人に幹事になってもらいたい。日常業務の多忙さ、他の業務との兼任、上司の無理解

など問題を抱えながらも頑張っている人に、この上、幹事をお願いするのはとても気が引けることであるが。

V. 将来に向けて

2000年12月現在、連絡会のメンバーは当館を含めて31機関である。この数字は数年間変わっていない。静岡県を網羅したネットワークとはまだ言えない状態である。当館が県の西に偏しているということもあるが、静岡県のネットワークとしていくためには、東部からの加入も推し進めていかねばならない。また病院図書室だけでなく、看護学校の図書室・図書館なども加わってほしいと思っている。定例会のたびに県下の未加入の主な医療機関長宛に連絡会入会勧誘の手紙を出しているが、反応は芳しくなく、このような手段での連絡会加盟機関の拡大は限界にきていると思う。これからは、実際に図書室で働いている人に直接働きかけていくのが有効ではないか。浜松や静岡で行っている勉強会は、土曜日など仕事が休みの日に自主的に行っている研修である。そのような場に未加入の病院図書室の人々も加わってもらえたら、連絡会の参加機関は増えなくとも、実質的に静岡県を網羅したネットワークになってゆくと思う。

平成14年には静岡市で医学情報サービス研究大会が開かれる。その時がこのネットワークを広げるひとつのチャンスである。

VI. おわりに

連絡会の前身である県西部医療機関図書館(室)懇談会が誕生したのが、昭和55年11月。現在の名称になったのが、昭和62年11月。そして現在まで、様々な人々の熱意と努力でこの連絡会が続けられてきたのだと、参考文献や『ぶっくとらっく』を読み返して感じた。最後に山村氏の文²⁾を引用して締めとしたい。

「大学図書館はもっと積極的にそして惜しみなく病院図書室に援助・協力をし、きびしい言い方かもしれないが、決して独走や主導権をとることなく、しかしネットワークの中では核となって活動することが、一県一医科大学が配されたことからみても、重大な役割であり責任であると思われる」。

参考文献

- 1) 山口直比古, 坂上光明. 医療機関図書館の地域ネットワークの試み, びぶろす 1988;39(8):180-6.
- 2) 山村美樹. 静岡県医療機関図書館連絡会のあゆみ, 医学図書館 1990;37(3):167-9.
- 3) 飯田育子. 静岡県医療機関図書館連絡会. ほすびたる らいぶらりあん 1995;20(1):23.
- 4) 江口愛子. 静岡県医療機関図書館連絡会: 大学図書館の立場から. ほすびたる らいぶらりあん 1997;22(4):139-41.
- 5) 飯田育子. 静岡県医療機関図書館連絡会: 現状と今後. ほすびたる らいぶらりあん 1997;22(4):142-3.
なお、この号は静岡県医療機関図書館連絡会の特集を組んでおり、ほかにも連絡会会員8名が寄稿している。
- 6) 飯田育子, 山口直比古. 浜松市病院図書室勉強会: 大学図書館と病院図書室担当者の自主研修, 医学図書館 1992;39(3):289-96.